

氏名	花形 武
学位の種類	博士（心理学）
学位授与番号	甲 第6号
学位授与の日付	平成28年3月16日
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当

学位論文題目 縮小版箱庭に関する基礎的研究

審査委員	主査	文教大学教授	岡村 達也
審査委員	副査	文教大学教授	今野 義孝
審査委員	副査	文教大学教授	高尾 浩幸
審査委員	副査	文教大学教授	布柴 靖枝
審査委員	副査	文教大学教授	谷口 清

## 論文要旨

本論文は、箱庭療法の発展的な可能性の一つとして、縮小版箱庭の臨床実践への導入について、三つのアナログ研究と二つの事例研究を通して検討したものである。

第I部では本論文の問題と目的を示した。箱庭療法は日本において広く普及しているが、箱庭療法用具を持ち運ぶことは実質的に困難であり、拡大している臨床実践の場において全てのクライアントに提供できるわけではない。この課題を解消するために、一般的な箱庭療法用具に関する検討が必要であった。これを受け、まず箱庭療法に用いる砂箱、砂、ミニチュアに関する基礎的研究の文献レビューを行ったが、持ち運ぶための用具を主題にした研究は見当たらなかった。そこで、森谷（1988）のコラージュ療法開発のきっかけとなったアイデアに着目し、持ち運び可能な縮小版箱庭の用具を試作した。ここで、縮小版箱庭を臨床実践で用いることを想定した際、四つの疑問が生じた。一つ目

は、箱庭制作における一般的なミニチュア（以後、実物ミニチュアと略記）とその紙製のミニチュア（以後、紙ミニチュアと略記）の用いられ方に相違があるのかである。二つ目は、両ミニチュアを用いた際の制作者の内的体験プロセスはどのようなものかである。三つ目は、縮小版箱庭を臨床実践に用いた場合にどうなるのかである。四つ目は、一般的な箱庭療法用具に対する縮小版箱庭用具の共通性と独自性は何かである。これらより、上述した三つの疑問を検討し、最後に一般的な箱庭療法用具に対する縮小版箱庭用具の共通性と独自性を検討することを本論文の目的とした。

第Ⅱ部では三つのアナログ研究を行った。箱庭療法においては、クライアントと治療者との関係性が重視されているが、アナログ研究においてその関係性を築くことは困難であるため、内的プロセスを対象とした質的研究である研究2と研究3においては、箱庭療法過程ではなく、箱庭制作過程を対象としている。

研究1では、実物ミニチュアと紙ミニチュアをそれぞれ用いた箱庭制作における制作データと、制作過程に対する印象評定の比較検討を行った。それぞれの箱庭制作において、満足感、制作時間、使用個数の分析を行った結果、両者の満足感、制作時間、使用個数に有意な差はみられなかった。また、印象評定に対しては因子分析を行った。それを基に下位尺度得点を算出し、実物ミニチュアと紙ミニチュアの差の検定を行った結果、有意な差はみられなかった。これらより、実物ミニチュアと紙ミニチュアのどちらを用いても、箱庭制作に対する印象には違いがみられないことが示唆された。しかし、素材が異なるミニチュアを用いたにも関わらず、何故有意な差が現れなかったのか、質的研究の必要性があることを指摘した。

そこで研究2では、一般的な箱庭療法用具を用いて、箱庭制作経験のない大学生・大学院生が初回箱庭制作においてどのような内的プロセスを体験し、継続した箱庭制作へ繋がるのかに関する仮説を生成することを目的とした。一般的に箱庭療法では、継続した箱庭制作による作品を系列的に見ていくことが推奨されているが、研究2では初回箱庭制作のみに着目した。箱庭制作が継続されるためには、初回箱庭制作時にどのような内的プロセスを経るかが重要であり、それを検討するために初回箱庭制作に焦点を絞った。研究2で生成した仮説は、事前イメージを持ちつつも箱庭制作に対して戸惑いを覚え、その戸惑い

を乗り越えることで体験過程の変化が生じ、制作中や完成した作品から次回へ続く制作意欲が生まれてくる、という仮説を生成した。

次の研究3では、研究2で生成した初回箱庭制作における制作者の内的プロセスのモデルを出発点とした。そのモデルに、一般的な砂箱と砂に、紙ミニチュアを用いた際の制作者の内的プロセスデータを追加することで、制作者の内的プロセスにその特徴的なカテゴリーが生じるのかを検討することを目的とした。生成された仮説より、一連の流れに大きな変化はなかった (Figure)。しかし、紙ミニチュアを用いることで「紙ミニチュアイメージ」と「固定用具 (砂箱・砂) への意識」から成る【紙ミニチュアの作用】が生成され、制作者のイメージ活性化が生じ、体験過程の変化へと繋がっていくと考えられた。また、箱庭制作においては視覚的要素が重要であり、その視点に立てば、紙ミニチュアは実物ミニチュアに劣るとは言い切れないと考えられた。これらのことから、紙ミニチュアを箱庭療法のアイテムとして発展的に用いる可能性が示唆された。

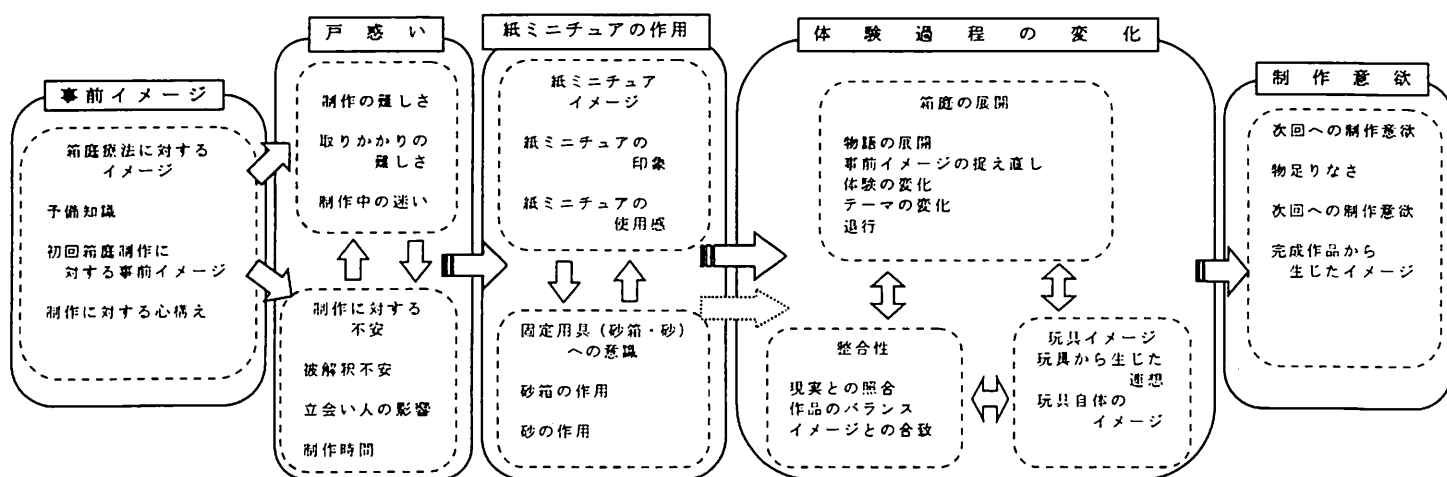


Figure 初回箱庭制作に紙ミニチュアを用いた制作者の内的プロセスのモデル

これらを受け、第Ⅲ部では縮小版箱庭を導入した三つの事例を提示し、臨床実践への導入について検討した。三つの事例とも、一般的な箱庭療法用具が設置されていない中学校におけるスクールカウンセリングとして実施したものである。

研究4は中学生男子二名に対する事例研究である。その中で、縮小版箱庭の提供方法として、それまでの治療の流れを維持するために、あえてそれまで通

りの対面した面接スタイルを維持することで、クライアントの初回制作活動に対する不安を軽減することができると考えられた。また、縮小版箱庭の砂箱は一般的な箱庭療法のそれよりも小さく、クライアントは箱庭制作に取りかかりやすいのではないかと考えられた。

研究5は中学生女子に対する事例研究である。面接において応答はするものの、クライアントから自発的に語る事が非常に少なかったため、クライアント理解の一つとして縮小版箱庭を用いて、箱庭制作という制作活動を導入した。その結果、クライアントにとって縮小版箱庭が新しい刺激となり、それまでの面接以上の会話が生まれることに繋がったと考えられた。また、本事例では現実生活が箱庭作品とリンクしていると考えられることが多く、作品内容に影響を与えていることが考えられた。

第IV部の総合考察では、一般的な箱庭療法用具に対する縮小版箱庭の共通性と独自性を検討した。そして、最後に箱庭療法の本質の一端について考察した。

砂箱の外的機能として、縮小版箱庭の砂箱も制作空間を提供するという点で共通性があるが、小さいサイズには持ち運びやすさが独自性として考えられた。また、砂箱の内的機能として、サイズは異なるもののクライアントを守るという点で共通性があるが、小さいサイズという特徴から箱庭制作への取りかかりやすさが独自性として考えられた。砂に関しては、同様の砂を用いているため共通性のみがあると考えられた。紙ミニチュアの外的機能として、箱庭制作において視覚的探索が重要な行動であることを踏まえた上で、紙ミニチュアからでも視覚的情報を得ることが可能であるという点で共通性があるが、持ち運びしやすく、紙ミニチュア自体を比較的容易に製作できるという点が独自性として考えられた。また、紙ミニチュアの内的機能として、ミニチュアの物理的相違が存在しても、視覚的情報により内的イメージが刺激される点で共通性があるが、紙ミニチュアの薄さという特徴から、砂箱や砂といった他の用具への意識をより高める点で独自性であると考えられた。

最後に箱庭療法の本質の一端について述べた。箱庭療法では、クライアントが箱庭制作を通して何を感じ取ったのかが重要である。子どもであれば思い通りに物語を展開しながら遊び、大人であれば思い通りに内的イメージを作品に仕上げるという制作活動によって遊ぶ。自由に遊ぶことで、クライアントは遊

び切ったという充実感を得ることが可能となる。一方、治療者は早急な解釈をするのではなく、クライアントのその充実感を共有できるよう努力する存在として、その場に立会う必要がある。つまり、クライアントは治療者に見守られた安全な空間において、自らが自由に遊び、そして遊び切ったという充実感を得ることによって癒されていくことが、箱庭療法の本質の一端であると考えられた。

#### 引用文献

森谷寛之 (1988). 心理療法におけるコラージュ (切り貼り遊び) の利用 精神神経学雑誌 (抄録集), 90 (5), 450.

## 審査結果要旨

**本研究の位置づけ** 箱庭療法は、箱（57cm×72cm×7cm）の中に砂を敷き、その中にミニチュアを置いて箱庭を制作する表現療法である。1965年、河合隼雄によって本邦にもたらされた。心理臨床実践の領域や場の拡大に伴い、用具が設置されていない場所でも実施できないか、すなわち、持ち運べる箱庭（療法）は可能か、との発想が自然に起こった。1987年、森谷寛之は、ミニチュアを紙製にするアイデアから、箱庭療法を立体コラージュと見、コラージュ療法を展開した。対して本研究は、ミニチュアを紙製にした上で、文字どおり「持ち運べる箱庭（療法）」の可能性を探究した野心作である。

用具として、縦横それぞれ2分の1の大きさの砂箱と、150個の紙製ミニチュアが製作された。これが本研究で言う「縮小版箱庭」である。労作である。

**本研究の課題・成果・評価** 第1の問題はミニチュアを紙製にすることの問題であり、第2の問題は砂箱の縮小の問題であり、第3の問題は臨床的可能性の問題であり、第4の問題は、臨床的可能性が示されたとして、箱庭療法の本質の問題である。

1. 第1の問題に迫ったのが第II部「縮小版箱庭の基礎的研究」である。まず、従来の砂箱を使用し、従来のミニチュアと紙製ミニチュアによってそれぞれ箱庭を制作してもらい、(1)制作過程への満足感、(2)制作時間、(3)ミニチュアの使用個数、(4)制作過程の印象の4点から比較が成された（研究1）。その結果、いずれの測度においても有意差が見られなかった。驚くべき結果であった。本邦初の箱庭における紙製ミニチュア使用に関する研究である（初出：心理臨床学研究，第30巻，2012年）。

こうした箱庭制作の所産に関する量的研究に並行して、制作の内的プロセスに関する質的研究が遂行された。まず従来の用具の使用による制作の内的プロセスの確定が先決である。そこで、制作体験のない研究協力者による、従来の用具を用いての制作体験のデータをもとに、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）によって、制作の内的プロセスの質的研究が行われた（研究2）。その結果、箱庭に対する「事前イメージ」を持ちつつも、制作に当たっては「戸惑い」、しかしそれを乗り越えることで「体験過程の変化」が生じ、次回への「制作意欲」が生まれる、という仮説が生成された。箱庭制作の内的プロセスに関する本邦初の質的研究となった（初出：箱庭療法学研究，第25巻，2012年）。

これをもとに、紙製ミニチュアの使用による制作の内的プロセスの研究が進められた。同じく制作体験のない研究協力者による、しかし紙製ミニチュアを用いての制作体験のデ

ータが次のステップとして加えられ、同じく M-GTA によって、制作の内的プロセスの質的研究が行われた（研究 3）。その結果、制作の内的プロセスの流れに変化はなかったが、「戸惑い」から「体験過程の変化」に至る過程を「紙ミニチュアの作用」が媒介する、という仮説が生成された。紙製ミニチュアの使用による特徴が現れた。箱庭制作においてはミニチュアを見るという視覚的要素が重要であるとの視角から、紙製ミニチュアが従来のミニチュアに劣るとは言えないと考察された。紙製ミニチュアを用いての箱庭制作の内的プロセスに関する本邦初の質的研究となった（初出：箱庭療法学研究，第 27 巻，2014 年）。

以上から、紙製ミニチュアを箱庭用具として用いる可能性が示唆され、ミニチュアを紙製にするアイデアからコラージュ療法を展開した森谷とは異なり、文字どおり「持ち運べる箱庭（療法）」の可能性の一端が開かれた。これらはしかし、臨床群を研究協力者としていないアナログ研究である。従来、アナログ研究による箱庭制作過程の研究が、臨床場面における箱庭療法過程の研究に寄与しうるとされてきたが、その論証ないし実証は課題である。

2. 第 2 の砂箱の縮小については、第 I 部「問題と目的」第 2 章「箱庭療法用具に関する文献レビュー」第 2 節「砂箱について」において、海外の砂箱の大きさや形状は本邦と異なることが多く、さまざまな工夫から多様な箱庭が存在することを示した上で、本研究では縦横それぞれ 2 分の 1 の大きさの砂箱に固定され、本研究の埒外に置かれたが、課題であることに変わりはない。

3. 第 3 の臨床的可能性の問題と併せ、ある部分、実践的に 2. に応えているのが第 III 部「縮小版箱庭の事例研究」である。縮小版箱庭は、治療者とクライアントが対面している空間構造を変化させず、両者の間に置いて実施することができる。これが研究 2・研究 3 で見出された制作に当たっての「戸惑い」ないし不安を緩和するかもしれないことが、2 つの事例を通じて考察されている（研究 4）。縮小版箱庭の臨床的意義を示すものである。

研究 5 は、まさに「縮小版箱庭療法」の事例研究であり、その臨床的可能性の一斑を示すものである。縮小版箱庭による本邦初の事例研究である（初出：文教大学人間科学研究科附属臨床相談研究所紀要，第 17 号，2014 年）。砂箱の大きさを縦横それぞれ 2 分の 1 と任意に固定した上は、事例から翻って砂箱の縮小について論究することが課題である。

4. これによって臨床的可能性の一斑は示されたとして、第 4 の箱庭療法の本質については、より一層の課題である。

結論 審査委員会は、野心作にありがちな幾多の課題のさらなる探究を期待するとともに、博士（心理学）の学位授与が妥当であると認めた。